

灯



日本のロタンといわれた朝倉文夫氏の代表作に「墓守」という作品がある。

若いころに拝見し作品の良さはよく分からず、それよりも墓守とはどんな仕事だろう、ということの方が記憶に残っていた。近年両親を見送り納骨などを済ませてみると、家を継ぐ、ということはお墓を守るのだ、と

守

墓



草野 義輔

考えるようになった。わが家のように江戸時代からのが記録に残り、伝来の墓地を持っているとなおさら強く感じる。

近年特に都市部では、核家族化が進むとともに、新たにお墓を造るとか墓所の維持管理などが大変だと聞く。また子や孫に自分の死後迷惑を掛けたくな

い、と生前に自分のお墓を準備する高齢者も増えているらしい。それぞれの考え方だとは思いますが、私自身は両親の死去や埋葬について迷惑という印象はない。むしろ当然のこととして先祖代々の墓地に埋葬し、お盆など年に数回は家族とお参りをする。東京で働いている兄弟もたまに帰省すると必ずお墓参りに行く。

人間は必ず死ぬので死んだ後は残った者に任せざるを得ない。その時に迷惑だ、とか思わないでもら

えるような人間関係、親子関係をつくっていくことの方が自分の墓を生前に準備するより、よほど大切だと私は思う。そんな関係がつくりにくくなっているとするれば、そこに現代社会の大きなひずみが潜んでいる気がする。今年も間もなくお盆だ。

(昭和学園高校理事長・日田市)